

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は于額狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の特點

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高稚色

目 次

大法鼓經の大意……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀普賢經……………	井 村 日 成
菩薩行に就て……………	本 多 日 生
妙鏡尼に法衣を贈るの文……………	本 多 日 生
靈山身延へ……………	荻 野 慶 三
聖訓摘要……………	本 多 日 生

第 三 十 一 年 十 二 月 號

不 許 複 製

昭和二十二年十一月二十五日印刷 第三百九十二號

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金五圓
四分一頁	金二圓五角

統一定價	
一冊	金貳拾圓
半年	金壹拾圓
一年	金貳拾圓
送料共	送料共
郵之金前	郵之金前

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
社 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
編輯兼 國友 日 斌
印刷人 鈴木 日 斌
社 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
編輯所 統一編輯局
發行所 統一發行所
電話東京五一〇七一番
名古屋五〇八七番
電話名古屋一〇八一六番



教

第二卷第十一號出づ

本誌執筆者

その堂々たる内容
各方面の名家執筆

- 本多日生
- 野田良治
- 澤田節藏
- 永井米藏
- 岩野直英
- 高島平三郎
- 石田誠

毎月一日 十一日發行 一部金十錢

發行所 教發行所
東京府荏原郡品川町南品川四二二
(振替東京一〇九四〇番)

本多日生猥下著書

(現在品のみで、賣切りのものは注
文されても餘計な手数で困ります)

- 本尊論 布装 一部 金七拾錢
送料 一部 金四拾錢
- 法華經要文 布装 一部 金五拾錢
送料 一部 金二拾錢
- 法華經の行者日蓮 一部 金一圓五十錢(送料共)
廿部 金一圓五十錢(送料共)
- 修法勸行の心得 一部 金十五錢(送料金二錢)
十五部 金一圓(送料共)
- 教育勸語と思想問題 一部 金廿錢(送料金二錢)
十部 金一圓(送料共)

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引御座會下さい。

大法鼓經の概要

本多日生

その次には三乘の開顯と言つて、一切經にいろいろ淺い教があり、進んで法華經の教が現れたのは、化城喻品に説かれて居るが如く、衆生をして一時途中に憩はしむるが爲に、假の休み場所を拵へて、遂には實の城に導き來つたが如きものであつて、如來が三乘の教を説くのは皆これ化城である、假にそこに城を拵へた唇氣樓的のものである。だからそこに留まるべきものではない、疲れた者の爲に一時の休息所をお與へになつたので、その化城に憩うて身の疲れが癒つたならば、先へ進んで更に本當の城に到達しなければならぬのである。他の方便の佛敎は途中に作つた化城の如きものであるが故に、そこに留

るべきものでない、即ち方便の教に依つて宗旨を立てるといふやうなことは容るべきものではないのである。さういふ化城に基いて宗旨を開くといふやうなことは罪惡なりと、佛敎研究の上に於いて斷定さるべきものである、化城は二日か三日かそこに逗留して、足腰がなほつたといふことになれば、それを毀して進んで行くのである、化城は滅却するが目的である。假の休息所である。ちようご軍人が露營をする時に、ちよつとそこらに藁を敷いたり、或は天幕を張つたりして宿舍を拵へるやうなものであつて、そこに一晚休息して更に進軍して行くのである。それを先へ進軍することを忘れてしまつて、何時ま

でもこの天幕張で宜しい、モウ別に立派な家に入りたいとも思はないからこの天幕張で宜しいと言つて、腰を落着けてしまふことになつたならば、その時には天幕も毀してしまへ、薬も捨て、しまへと言ふやうなものである。佛教が方便化城の教に留まつて宗旨を立てるといふやうなことは、何としても誤つたことゝ申さなければならぬ。たゞ宗旨に關してはいろ／＼の誤解があつて、人間の機根といふものがいろ／＼様々あるから、それに當がふ爲にいろ／＼に説いたのだといふやうなことを、好い加減の臆測を以つてごま化しのやうなことを言つて居る人が澤山ある、坊主にもあるし又世間にもあつて、何にも知らぬ者同士が好い加減の事を言つて語る、さういふものを以つて宗旨などは立てらるべきものではない。眞實を顯す爲に方便を用ゐることは許されるけ

れども、眞實を拒んで方便に留まるなどといふことは斷じて許さるべきことではないのである。次にいよ／＼空無我といふ問題に入つて、これが大事な問題として話されるのである。迦葉が申上げるときは、諸の大乗經に於いて空といふことが説かれて居りますが、あれはごういふ事でありませうかと尋ねた、佛が仰せられるには、一切の空經は是れ有餘の説なり。いろ／＼空といふやうな意味のお經はあるけれども、それは本當の教ではない、有餘の説である、有餘といふのは究極しない、まだ餘る所があると云つて、本當の事を説かないのを有餘の説といふのである。これに對して無餘といふのはモウ餘地が無い、駈引の無い眞實を説いたのを無餘といふのである、有餘の説といふのはまだ／＼殘されて居る、餘してある

所のものが澤山ある、その中途の話に空といふことが出て居るのである。それは前に申した如くに人間の凡情を除かしめるが爲には空といふことが宜しいので、人間の執着、煩惱の迷ひを覺ます道を指すが爲には、空の説といふものは頗る有効なものであるけれども、それが最後の教を考へては大變な間違ひになつて来る譯である。今大法鼓經はその空の思想を退けて有我の思想を説くのであるから、是れ無上の説にして有餘の説にあらず。

違つて居る。空とか無我などが一番えらいやうな事を言つて居るのは、は、ア、彼等は有餘の説にひつかつて居るな」と言へば、それで一遍にかたが附いてしまふ。古來佛教を能く研究した人は、禪宗の思想は佛法の極く低い小乗の空見に墮して居る、先づ八九分は小乗の空見であると評論して居る人があ

ると、如何にもそんなものであらう。小乗でもあんな事はあまり言はぬのであるが、支那の老莊學の弊害を餘計に背負込んだと言つて宜からうと思ふ、まるで言ふ事が佛法の柢を外れて居る。佛は衆生にいろ／＼の慾望があるから、それに從つて様々のお經を説かれた、これを能く研究してズツと通して佛教を見れば宜いだけども、佛法をやると言ひながらノラクラで、本當に學ばないからして、如來藏常住の妙典を捨て、即ち佛は常住不

れども、眞實を拒んで方便に留まるなどといふことは斷じて許さるべきことではないのである。次にいよ／＼空無我といふ問題に入つて、これが大事な問題として話されるのである。迦葉が申上げるには、諸の大乗經に於いて空といふことが説かれて居りますが、あれはごういふ事でありませうかと尋ねた、佛が仰せられるには、一切の空經は是れ有餘の説なり。いろ／＼空といふやうな意味のお經はあるけれども、それは本當の教ではない、有餘の説である、有餘といふのは究極しない、まだ餘る所があると云つて、本當の事を説かないのを有餘の説といふのである。これに對して無餘といふのはモウ餘地が無い、駈引の無い眞實を説いたのを無餘といふのである、有餘の説といふのはまだ／＼殘されて居る、餘してある

滅人格實在であるといふことの説かれて居る尊き教を捨て、種々の空經を好樂すて、空なごといふことが説いてあるお經を好み過ぎて、そこにはかり頭を突込んで、たゞその一句一文の字義に囚はれ、そうして又それにいろ／＼の事を附加へて、無暗矢麈に佛教が空見であるかの如くに敷衍して行くのである。さうして佛教の眞實は無我ぢや、空ぢやと罵るのであるが、彼は空無我といふことを言ひながらも、その義理を本當は知らないのであつて、實は智慧の無い男である。そんな事を言つて居る者は、しまひに滅盡に趣向すと言つて、生きながら自分が灰になるやうなことをやる。滅盡定と言つて、生きながら自分が息を引取つてその儘に空に歸するといふやうな、婆羅門の輩がやるやうな事を眞似をして、所謂智慧の無い人となり、滅盡定に墮ちる輩である。併

し空無我といふことは佛が説いたには違ひないが、それは人々に澤山の煩惱があり、間違つた考があるからして、それを除いてモツと高き眞實の思想に來らしめんが爲に、小我の見を除いて大我を認識せしめるが爲に説くのである。さうして涅槃といふ言葉は廣く使はれて居るものであるから、或はこれを誤解して消えて行くやうな意味に考へた者もあるだらうけれども、それは涅槃に關する一面の誤解である、眞の涅槃は常住安樂であつて、決して消えて無くなるやうなものではない、非常な立流な意味に於いての存在を意味するものである。美盡し善盡せるものであつて、何もかも揃うて完備して實在して居るといふ意味である。それが所謂大般涅槃である。一般に涅槃といふ言葉は廣く使はれるが故に、さういふ涅槃に關する思想も或る部分にはひつつかつて居る、

それ故にたゞ單に涅槃と言つたならば、さういふ意味にも取られるか知らぬけれども、大般涅槃所謂眞の涅槃といふ意味を加へたならば、それは何時でも常住安樂にして、そんな空とか無我といふやうな事はないのであると説かれて居る、その點は洵に明瞭な事で、前に申す通り大法鼓經は法華の思想を極めて闡明にすることが出来るのである。

我を破らんが爲の故に無我の義を説く」で、そこに世間執着の迷ひをさまして佛の教を説かうとするのである。であるから世間の凡情の迷を覺めさす手段としては無我の説は大事な教であつた。併し佛教に入つて信念増長すれば、遂に常住安樂有色解脱に達しなければならぬ、空無我は佛教の入口に於て世間の執着を破せんが爲に説くものであつて、信仰の進み行つた佛法の歸結は、常住安樂の有色解脱であると説かれて居る、洵に明瞭な次第である。

それは普通の迷へる人々は我我所と申して、自分の肉體及び自分に附屬して居る所のもの、即ち自分の家であるとか、自分の財産であるとか、自分の着物であるとか、自分の子であるとかいふ風に、この肉體との關係の爲に我我所の執といふものが非常に強い、それが爲に苦勞もし、罪もつくり、いろ／＼世の中の紛糾錯雜が起るのであるから、その我我所の執着を破らんが爲に無我を説くのである、「世間の

さうして佛といふものは、一切のさとりを得られて眞の涅槃に達せられたのであるが、その佛様が若しも磨滅して消えて無くなるといふやうなことであつたならば、世間の者はそれよりも先に皆な滅くなつてしまふ譯である。であるから一切の存在といふことの中の一番大切なものを以つて如來としなければ

ばならぬ。さうすれば如來の存在は滅せざるものにして常住安樂なるものである、常住安樂と言へば我は有るのである、我無くしてどうして常住安樂といふことが言へるか。であるから「實には有我にして無我にあらず」、眞の佛敎は有我にして無我にあらずとハツキリ説かれて居る。又一壞せず」と言つて決して如來の身がこはれてしまふやうなものではない、たゞ世間の凡情を救はんが爲に一時無我を説くのである、それが所謂方便である。併し方便と言つても、それはまるで嘘ではない、自己を見るに小我大我といふ二つが茲に見られるのであるから、少く考へて居る我と、大我といふ本當の我との二つが自分にあるのである。この大我は永遠に續いて行くところの眞の我である。これを忘れて消えて行く小我の一方にひつ懸つて居るから、この場合に於いてはこれ

を無我であると説くのである、大我の方に於いて有我を説くのであるから、無我といふことゝ有色といふことは決して衝突しない。凡我俗我に對して無我を説き、大我真我に對して有我を説く、無我の説は凡情に囚はれて居る者を導かんが爲に説くのである、信仰増進して涅槃の終は有我であるといふのであるから、少しもそこに衝突もしなければ矛盾もないのである。

そこでこの眞我といふものを認めることが大切になつて来る、普通の人間は皮相の我、死んで消えて行く自分だけしか知らない、さうしてそれを自分といふものゝ全體だと思つて居るから、そこでいろいろ教を立てられ、その佛性の教に關して四つの譬を茲に擧げられて居る。これは法華經の大事な思想であり、又佛敎全體から言つてもこの四つの譬といふ

ものは忘れてならないものである、その四つの譬といふのは翳眼の譬、重雲の譬、穿井の譬、瓶燈の譬といふのである、この四つの譬を佛は非常に大事なこととして、佛敎を信するくらゐの者は斯ういふ譬を記憶せねばならぬと強く説かれて居る。

第一の翳眼の譬といふのは、眼の珠に薄いものがかゝつて、物がハツキリ見えなくなる病氣を言ふのであつて、さういふ病氣に罹つて居れば、いくら物があつてもハツキリ見えない、その眼が霞むところの病氣を癒してしまへばハツキリ物が見えるやうになるのである。それと同じやうに人々は佛性を有つて居るけれども、翳眼の病に罹つて居るが如くに、その佛性を薄皮がかゝつたやうな意味に曇らして居る、それが人間の迷ひである。斯う説かれるのである、それから第二の重雲の譬といふのは、月は何時

も輝くのだけれども、雲がかゝる、それも薄い雲ならばボンヤリと光が見えるけれども、非常に濃い重なつた雲が一バイ月を蔽うて居ることに依つて、月は中天に出て居るのだけれども、まるで光が見えないやうになる。人々の佛性の月は本來輝いて居るのであるけれども、煩惱の重雲がこれを蔽ふが故にその光を見ることが出来ないのである。第三の穿井の譬といふのは、井戸を掘りさへすれば何處でも水は出るのである、それは地下三尺にして水の出る所もあり、五尺七尺一丈にして出る所もあるけれども、堀つて水のある處に達すれば何處でも必ず水は得られる、それと同じく人々の心には佛性の淨き水を有つて居らない人は無いのである。それが極く淺い、一尺堀つて直ぐ出るくらゐな罪の淺い人もあり、一寸も堀らなければ出て來ないやうな人もあるけれど

も、併し堀りさへすればどんな人の心の中にも佛性の清き水は湛えられて居るものであるといふのである。第四の瓶燈の譬といふのは、燈の光が輝いて居るのだけれども、それが瓶の中に入れてあつて、或は籠燈提灯のやうな具合に、筒の中にその燈を入れて、その中で光つて居るやうなものであるから、外からは眞暗闇である、この瓶を割さへすればその中にちやんと燈は光つて居るのである。吾々の佛性の火は輝いて居るけれども、瓶を以てその光を蔽うて居るやうなものである。斯ういふ四つの譬を擧げられて、これは釋迦如來が我が教の誇りであると言つて居られる、佛教が他の宗教に對して誇るべきものはこの四つの譬であると言つて、何時もこの話をせられて居つたのである。

尙ほこれを纏めて一つの大きな譬とする時に蓮華

るか、こつちへ行つて居るかも知れぬで、狐に向つて南無妙法蓮華經とやつて居る、實に淺ましい事である。蓮華といふのは自分の佛性の自覺である、それは自分を一つ信ずるといふことが又佛教の最も大事なことナンである。一切の本當の仕事は自分を信じなければ出來るものではない、自分にそんな事が出來るか出來ないかといふやうな危な氣があつたならば、一切の事はやれるものではない。相撲取が「俺は體は太つて居るが、洵に腹が弱くて力が足りない、土俵の上のぼることなどは大嫌ひだ」と言つて居るやうな者は、到底立派な相撲取にはなれつことはない、「俺は相當に力もあり人も勤めて呉れるから一つ立派な相撲取になつて見ようかな」と思つて、それから師匠を取つて訓練を経て始めて立派な力士になれるのである。最初から俺は體は大きいけれど

の譬を擧げられたのである、蓮華の譬はこれ等の澤山の譬の王様である。蓮華といふものは泥の中に根があつて、それが芽を吹いて遂に美しい花を開くのである。人間も表面を見れば泥水のやうであるが、その中に蓮の根のやうな立派な佛性を有つて居る、根が今に芽を吹けば美しい花を開くが好きものである。人々の心を表面より見れば泥水の如くであるが、その中に蓮の根が腐らずしてあるやうなもので、その内に水面に出て美しい花を開くのである。この蓮華の譬が四つの譬よりもモツと宜しいといふので、最後法華經に至つては妙法蓮華經と言つて、蓮華の譬を經の表題とされたのである、佛教を信する者は忘れようとしても忘れられない事である、それを南無妙法蓮華經と口には唱へても、蓮華などといふことは忘れてしまつて、蓮華の花がこつちへ行つて居

も駄目だと言つて自分の力を信じないやうな者は決して力士になることは出來ない。佛に成るのもその通りであつて、今の他力本願といふやうなことは、まるで、相撲取にはなるけれども土俵の上で勝負は逆も出來ないから、相撲は取らないで給金だけ呉れといふやうなものである、さういふことは宗教としては實に意味をなさない。そこで法華經の説は佛性を十分に信せしめ、自己の力を信せしめて、それから一方に佛の感應を信せしめて、そこに自力他力結合して完全なる宗教を説かれて居るのである、その事が茲に四つの譬で説かれた意味合である。

さうして仰せられるには、この佛性を有つて居るといふことの自覺は、直にその對手方たる佛性を考へることになる、佛性は即ち子であるから、その佛性が現されて行く親といふ感じが直ちに起る。然る

に子として親を尋ねないとか親を知らないといふことになつたならば、それは實に間違つた事である。

何ぞ鄙さの甚しきや、實に是れ佛子にして而も父を識らざるなり。

とハツキリ説かれた、佛性論を研究して行けばどうしてもそこに行くのである。人間の子といふのは小我の方から言ふからであつて、大我の方から言へば人間は皆な佛の子である、その佛の子といふ自覺に達して居りながら、父なる佛を尋ねないとしたならば、これ位鄙さき者はない、子にして父を知らぬといふことは一番淺ましき者を言ふのである、その事が茲に説かれて居る。佛性の思想といふものを研究すれば、當然佛子の自覺に達する、佛子の自覺に達すれば、その親である本佛を渴仰しなければならぬといふことは、常々吾々が諸君にお話して居る事であ

少數ではない、あつちにもこつちにも非常に澤山の敵軍が間近に押寄せて来た、逃げろ〜といふので、道も無い所の横道の方へと兵を率つて逃出した。ところが非常な泥の深い沼見たいな所に落込んでしまつた、足が泥の中にはまり込んで出ることもどうする事も出来ない、まご〜して居る中に虎や狼が出て来て、その爲に皆な喰はれてしまつた。斯ういふ譬を擧げて、これは佛法を學ぶ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等にして有我といふことを恐れて、たゞ無我空見といふことが本當の佛敎だと考へて、今以つて佛性常住或は佛の常住といふ大事な敎の意味合を信樂せずして、さういふ思想をこはがつて逃げ歩くが爲に、遂に沼の中に落込んで虎に喰はれると同じ事である、まるで意味を成さぬ佛敎となつてしまふといふことを諷められて居るのである。これは

る。日蓮聖人もその意味を始終仰しやるので弟子一佛の子と生れ諸經の王に事ふ、何ぞ佛法の衰微を見て心情的哀惜を起さざらんや。

と立正安國論に説かれたが如く、一佛の子と生れてといふその信念が非常に大事なことである。それから進んで無我の迷ひに墮ちて居る人が、有我といふ佛法の敎を聽いてまごついて居る有様を諷められて居る。それは譬を擧げられて、茲に侍の大將があつて戦に行き居つたところが廣い野原に出た、敵が近づいては居ないかとピク〜しながら軍隊を進めて行つたところが、澤山の鳥が集つて林の中で啼いて居つた、それが遠方であるから鳥の聲といふことがハツキリわからない、何かザア〜といふ音が聞えた、臆病な大將であつたものであるから、その鳥の聲を聞き違へて、サア敵軍が近づいた、面も

非常に面白い譬で、今日のやうに佛敎を多く無我の見に於いて解釋して居るやうな坊さん達は、茲に説かれた空澤の中に陥つて虎狼の爲に食はれるところの大失敗者であると言はなければならぬ。

斯様にしていろ〜のお話が終つて、最後に佛が迦葉に仰しやるには、今この法座の大衆の中に惡魔が混つて居る、汝等が法を護るといふことは、唯だ法を説くばかりではいかぬ、その善き法を妨げるが爲に偽つて法座に来つて居るところの者を諷めなければならぬ、先づ敵を知らなければならぬ、汝この法座に来れる惡魔を見出せよと言はれた。そこで迦葉は驚いて、一生懸命に大勢の聽衆の中に何處に惡魔が居るかと思渡したけれども、一向わからない、「どうも私にはその惡魔といふものは發見することが出来ませぬ」と申した。その時に釋尊は離車童子

に對して惡魔を發見せよといふことを命せられた、離車といふのはその土地の大名といふやうな者で、童子といふからその息子で、所謂役人であつて、惡者を見出すといふやうなことに長けて居る者である、たゞ優しい坊さんではない、それに命せられた。離車童子は非常にえらいので、サツと立上つたかと思ふと、法座の真中頃に、非常な優しい顔をして坊さんの相をして坐つて居る、誰もなか／＼美事な坊さんだと思ふやうな一人の比丘をいきなり捕へて後手に縛り上げてしまつた、五樂といつて手も後手に縛り、足も縛り、頸も共に縛つてしまつて、少しも動くことの出來ぬやうに、まるで芋虫みたいにして、そこにゴロンと放出して、惡魔はこれでありますと言つて佛に申上げた。惡魔は非常に恐れを懷いて顔えて居る、離車童子はたゞ縛つたゞけでは承知をし

ない、正法を妨げる貴様は體を寸斷にしてやるから覺悟をせよ、貴様のやうな奴は活かして置けば惡こそ爲せ、善の爲には何等益する所の無いものである。相は坊主であるけれども、惡魔だ、打殺すと言つて非常に怒つたので、惡魔は恐入つて、どうぞ命ばかりはお助け下さい、モウ決して妨げは致しませぬと言つて、泣叫んで命乞ひをした。左様に言ふならば今日は勸辨してやる、今後再び正法の妨げをするやうな心を懷くならばその分には捨て置かぬといふことになつて、漸く許されたのである。

といふ意味を説かれた。これが面白い點で、佛の實在といふことはたゞ心に信すれば宜いやうなものだけれども、善い事を少しもしないでたゞ信心だけ強盛にといふのでは、眞の如來を認めることは出來得ない。それはどういふ意味かと言へば、他の事に於て多くの人に經驗があると思ふのであるが、商賣なら商賣をするといふことに就いて考へると、一生懸命熱心に商賣をやる／＼といふ事は考へて居つても、唯腹を組んで考へたゞけではどうもその熱心が熱心ほごに行かぬ、少しは商賣の手傳をしながら、今度は本氣でやらうと思つて、店の手傳をしながら熱心に考へて行くといふことになつて、始めて本當の熱心が出て來る譯である。習字の稽古をするのも、手本などは書かなくても熱心さへあれば、一生懸命に上手になるやうにと考へて居れば宜いと言つ

て、たゞ熱心に上手になりたい、上手になりたいと思つて居るよりも、實際に手本に就いて稽古をしながら熱心を鼓舞すれば益々その熱心が鮮かになつて行く。それと同じやうに佛の實在を信するといふに就いては、やはり自分が佛の慈悲に感孚して、その爲には慈悲の心が己れにうつるのであるから、親が有難いと思へばその有難い心持が自分をやさしくして、優しい人間に仕上げて行くが如くに、どうしても善を行ふといふことを伴つた信仰でなければ、眞に如來の常住を認める力が弱いといふことを説かれて居る。この意味が洵に大事なことだと思ふので、無論信心が一番肝要であるけれども、たゞ空虛に信心々々と言つて居るのは、永い間孝行が大事だ／＼と思ふばかりで、三年経つても饅頭一つ買つて歸らない、お壽司の一つも拵へて上げたい、肩を一べん

叩かないといふことになる、心は大事だけれども、あまり心ばかりで何にもしないと終ひには心も消えて行くのである。それは親が大事だといふ精神が一番肝要であるけれども、出来得ることは事實上親孝行のはたらきをして、肩を叩きながら親が大事だと思へば、その有難いといふ精神が一層強くなる。これは餘程能くお互ひが考へて置かなければならぬ事だと思ふ。

さういふ意味合を最後にお説きになつてこの經は終つて居る。最初に申した通り大法鼓經はやはり法華經の一部であつて、斯ういふ精神は法華經の中にあることナンである、その意味の明瞭を缺いて居ることを、斯様なお經に依つて明かにして行けば宜いのである。法華部にはまだこの他に澤山のお經があつて、それ等のお經が皆な相寄つて、法華經を中心

にしてその思想を發揮して行かなければならぬ、往いては一切經悉く法華經の爲にこの意味を明かにするものであると私は信する次第であるから、大法鼓經に説かれた大事な事柄はその儘法華經の精神であり、内容であると考へて差支ない、その意味に於て之を記憶せられんことを望む次第である。(完)

大阪教報

十一月七日蓮成寺僧口法難會「偉なる故日蓮聖人」京藤布教師「正しき信念」和井田寛丹氏△十一日堂岡寺法難會「蓋口法難を思ひて」京藤師「永遠の生命」上田師△十三日中央公會堂にて「實生活と信仰の世界」中川文學士△十八日蓮成寺にて婦人會「名は體を顯はす」萩原僧正「信仰の華報と果報」本多現下△全夜大紙俱樂部にて立正結社秋期大會「法華經より觀たる佛教」萩原僧正「思想の基準と佛教」本多現下△今日堂大阪造兵廠にて「思想問題と國家の興廢」本多現下△二十二日堂岡寺にて「唱題の意義」和井田氏「救の力」上田氏何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。

信行の基調を説ける觀普賢經 (終回)

井村日咸

四一、大乘の力の故に能く勝法を生ず

作是悟已復更頂禮一切諸佛及諸菩薩。思方等義。一日乃至二七日。若出家在家不須和上不用諸師。不白羯磨。受持讀誦大乘經典。力故。普賢菩薩助發行。故是十方諸佛正法眼目。因由是法。自然成就五分法身戒定慧解脫解脫。知見諸佛如來從此法。生於大乘經。得受記莖。(五一、二、五)

大乘甚深の妙義に依つて三寶に歸依する功德を擧げられたのである、本節は積極的に勝法を受得るを明し、次には消極的に惡法を滅することを明かされたのである、此文の中に諸佛を禮するは歸依佛であり、大乘經典を讀誦するは歸依法であり、普賢菩薩の助發行を受くるは歸依僧である、和上を須ゐず諸師を用ゐず白羯磨せざるとは、形式的の受戒作法を行はずとも差支なきことを言ふたので、現在我々が行ふて居る勳行の形式で宜しいと云ふことである、實在の本佛を歸依するが故に、現前の聖衆を迎へずとも、我等の信仰は本佛の慈悲と結合するの

である、それを簡單なる形式に現して本尊を勧請する、紙木の本尊を置くが此は其實在の實體を表現する寫象であることは屢申した通りのものである、其御前に大乘經を讀誦し、大乘の義を思ひ大乘の事を行ふに、本化僧寶の助力を願ふ次第で、其三寶の御前に今身より佛身に至るまで能く持ち奉る南無妙法蓮華經と自誓受戒するのが、我々の現在行ふて居る日々の勤行である、此意義と同じである、斯様に三寶歸依の功德に依つて自然に五分法身を成就する則ち佛位の證悟を得ることが出来ること云ふのである、五分法身の事は無量義經の時に申上げたこと故茲では略して置きますが、佛位の證悟を五方面より見たものと考へて居れば宜敷であらう。

四二、大乘の力の故に能く惡法を滅す

是故智者若聲聞毀破三歸及五戒八戒

無ければならぬ、此點は充分に了解するを要する、何うも法華宗の信者は即身成佛と言ふ言葉に囚はれて、懺悔も無く反省も無く、直に滅罪を言はふとする癖があつて困るが、如何なる場合でも懺悔反省あつて始めて、滅惡生善の結果を得るものであることを忘れてはならぬ、今文にも、方等經典を讀誦し第一義甚深の空法を思ふて其空慧をして心と相應せしむと説いてある通り、此空慧即ち懺悔して一切の有相を離れたる處に眞實相の妙慧が発現する處を言ふたのである、罪惡其儘直に佛果と云ふ如き議論は理論としては語り得るも實際上の問題として其實現は無いものと思はねばならぬ。

若優婆塞犯諸威儀作不善事作不善事者所謂說佛法過惡論說四衆所犯惡事偷盜姪妹無有慚愧若欲懺悔滅

比丘戒比丘尼戒沙彌戒沙彌尼戒式叉摩尼戒及諸威儀一愚痴不善惡邪心故多犯諸戒及威儀法若欲除滅令無過患還爲比丘具沙門法當勤修讀四方等經典一思第一義甚深空法一令此空慧與心相應當知此人於念念頃一切罪垢永盡無餘是名具足沙門法戒一具諸威儀一應受人天一切供養。(五一三、二)

小乘聲聞の教の中に於て諸戒を毀破し諸の威儀を具せず、當然教の外に排斥せらるゝ様の行爲あるものも、此大乘方等經典を讀誦し、其教旨に依つて懺悔するならば一切の罪業は忽ち消滅して沙門の法戒を具足し得ると示されたのである、此は今經に説き來りし様に自己の過惡を懺悔することが前提で

諸罪者當勤讀誦方等經典一思第一義。(五三一、九)

前段は出家者に就てあり、今は在家者に就て申されたのである、在家者にして諸の不善の事即ち佛法に對して誹謗の言論を爲し或は世間の道徳に背反する様の行爲あるもの等にして、其罪咎に對する責任解除せんと欲するならば、當に此方等經典を讀誦し第一義の空法を思ふて、其罪咎を懺悔すべき様御勸告に相成つたものである、方等經典を讀誦すると言ふことは、今日の様な空讀でない事は前に度々申上た事である。

四三、王者大臣等の失惡を明す

若王者大臣婆羅門居士長者宰官是諸人等貪求無厭作五逆罪謗方等經一具

十惡業、是大惡報應、墮惡道、過於暴雨、必定當墮阿鼻地獄、若欲滅除此業障者、應生慚愧、改悔諸罪。(五一四、二) 王者大臣とは政治家、婆羅門とは學者、居士とは思想家、長者とは富豪、宰官とは官公吏と云ふ處である、此等のの人々の罪惡を擧げられた文である、昔も今も變らぬと見へて此文に擧げられる様の罪惡は現今でも益々犯されつゝある様である、是諸人等貪求して厭くこと無く、所有方面に醜問題の起りつゝあるのは貪求して厭くことを知らざる結果である、其他日々の新聞紙上に報導せらるゝ大小記事殆ど罪惡ならざる無しと言ふても過言ではあるまい、斯様な世の中には正道に向ふべきものは殆んどあり得べからざることであろう、是大惡法惡道に墮つべき事暴雨にも過ぎ必定して阿鼻地獄に墮つべしとの嚴戒

恐るべき哉、宜敷大懺悔大反省をせねばならぬと説き給ふたのである、己人々々の懺悔も必要な事であるが、上に立つて指導するものは殊に正しく振舞はねばならぬ次第であるにも係らず、事實は此に反對して居ることは國家の將來を危殆に導くものである、故に此處に國家の大懺悔を提唱せられたのである、佛教は單に己人的救済を志したものである杯言ふ人もあるが此は大なる誤謬である、釋尊は國家と言ふ事を始終考へて居られた事は澤山の國家に關する所論あることに依りて明白であるが、今經も其一であつて國家的大懺悔に依りて人類の幸福を増進せしめんとせられたものである 傳教大師が比叡山に戒壇院を建設せんと企畫せられたのも、日蓮聖人が本門の戒壇建設の理想を有せらるゝ事も皆此國家的大懺悔を實現するの目的に依るものである、單なる己

人の信仰に關するものであるならば國立戒壇の建立は必要とせないのである。

四四、利利居士懺悔の法を明す

佛言云 何名利利居士懺悔法 利利居士懺悔法者 但當正心不謗三寶 不障出家 不爲梵行人 不作惡留難 上應當繫念修六念法 亦當供給供養 持大乘者 可必禮拜 應當憶念甚深經 法第一義空 思是法者 是名利利居士修第一懺悔。(五一四、七)

利利居士懺悔の法として五種の懺悔が説かれてある、此文は第一の懺悔の文である、利利とは印度四姓の中の一にして主として政治に關與する人達で、前文にある王者大臣と云ふと同じ事である、此文に

利利居士と大擧げであるが、前文と同様王者大臣婆羅門居士長者宰官等の全部の懺悔法である、第一の懺悔法は三寶を敬ひ正法を興隆すべき事である、我國には聖德太子の制定せられた十七憲法の中に篤敬三寶の一條文のあることは正しく今經の第一懺悔の趣旨を體せられたものと思ふ、三寶興隆して人心を歸一し其嚮ふ所を明かに爲し得た事であつたが、後世漸く其意を失ふに至つた事は國家の爲に大なる損失であつた、日蓮聖人の立正安國の大活動も此を實現せんとの趣旨に外ならぬ。

第二懺悔者孝養父母 恭敬師長 是名修第二懺悔 第三懺悔者正法治國 不邪枉人民 是名修第三懺悔 第四懺悔者於六齋日 敕諸境內 力所及處 令

行_二不殺_一、修_二如_レ此法_一、是名_レ修_二第四_一懺悔。
第五懺悔者但當_二深信_一因果、信_二一實道_一、知_レ佛不_レ滅是名_レ修_二第五_一懺悔。
(五一五、三)

第二の懺悔は道德行為の完成である、茲に擧げたのは父母師長に對すること丈ではあるが、道德行為は其根柢は一つであつて幾つもあるものではない、我等の誠心、このまごゝろ其向ふ方面によつて名が違ふ、親に對すれば孝、君に對すれば忠、友に對すれば信と云ふ様に爲るのである、故に二を擧げて他は略せられたもので、此二に限ぎつた次第では無い、廣く數へれば教育勸語に擧げられた徳目の凡てに行互る譯である、第三は正法治國の理想である、今日法律を以て國を治めて居るが、法律の根本も天理に順應したものであらうが、實際にはお互同志の御

ある、法律を如何に巧に作つても神佛の實在を信せざる限り犯罪者は絶ゆるものではない、其原理を茲に示して國民教育の根本理想とせよとの御垂示である、斯様に國家が懺悔を修するならば其處に理想的の國家を建設するを得て、轉輪聖王の治め給ふ國土を實現し得る次第である、國家的懺悔滅罪を計るべき教主釋尊の對國家的垂訓はかく重大な意義を有するものである。

四五、此法を持つ者の得益を明す

佛告_二阿難_一、於未來世若有_レ修_二習如_レ此懺悔法_一、時當知此人著_二慚愧服_一、諸佛護_二助_一、不久當_レ成_二阿耨多羅三藐三菩提_一、說_二是語_一、時十千天子得_二法眼淨_一、彌勤菩薩等、諸大菩薩及以阿難聞_二佛所說_一、歡喜奉行。
(五一五、八)

都合で、多數で決すれば非理も理に通る現代では一寸考へさせられるが、其根本を正法を以て國を治むる處に置かねばならぬ、人民を邪枉せずと云ふ理想も現代にては政黨政治とか言ふ様なお影で随分開くも厭はしき問題が各方面にある様だが、一日も早く正義正理の下に安住したいものである、第四は一般國民に慈悲心を養成する爲めに殺生禁斷の行為を示すことである、第五は信仰道德思想の方面に於ける其根柢と爲るべき教理信條を示されたので、道德と言ふも政治と言ふも、其根本感念に因果律の法則と神佛實在の觀念が爲ければ權威あるものでは無い、義務の觀念で行ふ道德は餘義なくせられて行ふのであるから決して完全のものでない、因果を信じ神佛の實在を信じてこそ、進んで道德行為を勵み、惡き行為を慎み善良なる人たらんと志す様になるので

今經の流通分である、總勸で未來世に此經を受持すべき様御勸に相成り、此懺悔法を修習する者は阿耨菩提即ち佛果を得べきこと、疑無しと保證せられた處である、希くは今經を拜讀するの人士は宜敷く懺悔滅罪して速に佛身を成せられんことを、甚だ粗雑なお喩で分り難いことであつたことゝ存じますが此を以て最終と致します。

四日市教報

拜觀すべき秋の好季に入り當市に於ては本多日生院下の御來佛を得て日蓮主義大講演會を開演する事が出来た。十月二十日現下には午後三時三十分列車にて御來西五時より東洋紡績會社富田工場の御講演全七時より安樂寺に於て「開會の辭」田久保山主に次で現下は「信仰の果報と華報」の題下に御講演があつた。今月二十四日堀木修次郎宅家庭講演「改宗に因みて」田久保本醫師の座談法話ありたり。

菩薩行に就て

本 多 日 生

そこで信心が有難いから信心といふことを力説するの悪くはない、信を根本にして一切の善が行はれるといふことも到る處に説かれて居るし、それに相違も無いことだけれども、擴げて言へば信といふことも善根の一種である。壽量品の中に、

「諸の善根を生せしめんと欲して若干の因縁、

譬諭、言辭を以て種々に法を説く」

と仰せられた。諸の善根を生せしむるといふその諸善根の中に、信心が入つて居るのである。諸善根の主なるものは五根と言つて信根、念根、精進根、定根、慧根をいふのである。信念が即ち善根である。

けば、信心と善根といふものを併せ行ふところの教化となるのである。

日蓮聖人の爲された事蹟の如きは、信心は燃ゆるが如き熱烈なるものであつて、即ち暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光にも本佛を信念せられた、暮れ行く空と有明方といふのは、朝と暁とを挙げたので、朝夕不斷といふ言葉があるが如くに、二六時中何時でも佛様の事は忘れない、だから「何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れんや」と言はれて、何時の場合に於ても本佛の大慈悲を忘れることは出来ないと云つてあるのである。さういふ信心を日蓮聖人が有つて居つて、さうしてその一代の行爲を見れば、菩薩行の實行者であつて、その行爲は實に堂々たるものである。唯だ信心さへあればそれで宜しいと言つて善根を獎勵しなかつたものではない。あ

信心といふこと、善根といふこと、を對立せしめて喧嘩をさせるといふやうなことは、間違つて居る。信念と言へば善根の母、善根と言へば信心を含んで居るものである。善といふ言葉と信といふ言葉をモツと能く調節しなければいけない、ちようご母と子といふやうなものであつて、子無ければ母といふものではないのである。母が無ければ子は無いのであるから、母と子といふものは必ず結付いて居るものである。信心と善根とは母と子の如きものぢやと考へれば間違ひなからうと思ふ。それが菩薩行である。簡単に言へば、菩薩行を獎勵するところの教化を布

らゆる點に於て日蓮聖人の活動は自ら六波羅蜜の行に適つて居る、日蓮聖人の智慧、その一心決定、その勇猛精進、その忍辱決定、その持戒堅固、その布施旺盛といふことは、聖人の一代の行動を見れば能くわかる、實に菩薩行を完全に實行したものである。即ち日蓮聖人は信心と六波羅蜜の實行者として考へなければならぬと思ふ。

たゞ法然上人や親鸞上人の向ふを張つて、彼等が念佛で鉦を叩く、こつちは南無妙法蓮華經で太鼓だ、太鼓と鉦とどつちが宜い、鉦は陰氣ぢやないかといふくらゐのことややつて行かうとするのは、昔の學問の無い時代の俗論で、これは床屋の喧嘩といふものである。「お前の方は鉦カイ、鉦は陰氣ぢやないか、俺の方は太鼓だぞ」といふやうな譯で、何も教學を研磨せざる床屋學問といふものである。併しそれが

非常に一時は擴がった。坊主は皆な床屋學問のやうなことになるので、昔の法華宗の檀林といふやうなものは、佛教は無論研究しないのである。天台の、日蓮聖人の遺文も全く見ないのである。天台の書物は見るのだがそれは能くわからない、天台の摩訶止観といふやうな書物は面倒な書方であるから、餘程えらい者でなければわからない、併しわからないといふ言へないものだからわかたやうな顔をして、好い加減な事を言ふ、聴く方は無論わからぬのだから、結局わかりつこはない。わかる所は鉦と太鼓見たいな話になつてしまふ。そこでごつちが易い、ごつちが易いと言つて、易いことの喧嘩をする、私が覚えてからも「明教新語」といふ佛教の新聞で長い間、喧嘩をした、念佛門と法華宗の議論であるが、その議論の表題が「六七碩異辨」と稱して六字の名號

と七字の題目と大いに違ふといふことを論じ合つたものである。念佛の方では何處までも易いといふ話に就て、「念佛は六字である、法華の題目は七字であるから、念佛の方が一字易い」と言ふ、さうすると法華の方は「いや、五字七字の題目と言つて、ごつちが妙法蓮華經の五字で宜いのだ、お前の方は六字だから一字多いぢやないか」と言ふ、さうすると又向ふで「お前の方が南無を取るならばごつちも南無を取る、ごつちは阿彌陀佛の四字であるからやつぱりごつちの方が一字易いぞ」と言つて争つた。それは昔狂歌につくられて居るくらのこと、

五字と四字とでくじになり

一字の事でいうじ迷惑

といふ歌が出来た、四字の念佛と五字の題目の争ひが遂に公事となつて裁判所まで訴へられて、それが

爲に寺の住持は裁判所へひつ張り出されて、錢を使つて飯が食へないことになり大に迷惑をした、そこで一字のことで住持が迷惑をしたといふ狂歌がつくられるくらの熱心につまらない喧嘩をした。宗旨の争ひと言つても今までやつたのは多くそんな事をやつて居る、今吾輩が佛教の正系に基いて、宗教の本質よりして將來の文化を考へて論じて居るやうなことは、まるで觀念の違つたことであつたのである。今吾々が論明せんとして居ることは左様な幼稚なことから話を進めて居るのではない。日蓮主義者は宜しく左様な教敵といふものを淨土門などに置かないで、日蓮聖人の當時は淨土門が勢力を得て居つたから念佛無間が一番大事なことであつたらうけれども、今後の法華は世界の文化に對して進んで行くのであるから、そんなものを眼中に重く見る必要はない、

佛法の正義を掲げて起つて、人類の文化に踏み迷つて居るところの一切衆生を救ふべく、釋尊の遺法を光顯するところの大責任に歸らなければならぬ。我が敵は念佛門の如き幼稚なるものにあらずといふことが、今日日蓮主義者の自覺を起すべき所であると思ふ。それ故どうしても佛法論のこの大事な教義を完成して行くに就ては、信心と六波羅蜜といふことをモット法華の信者が能く心得て、佛教徒を率いて行くところの先覺者とならなければならぬ。この事は私は豫言して置く、今此處で私が菩薩行に就て論明して置くことは、他日必ず思ひ當る時が来る、成程うまい所を注意して論明し居つたものだといふことがわかる時機が来る。今はまだくだらない所ばかり力を入れて居るけれども、佛教の死活はこの菩薩行の問題にあるのである。

そこで前回には菩薩行の根本觀念として優婆塞戒經の概要を御紹介したのである、優婆塞戒經は佛法を信する者の通則原則を明にした、佛教信仰の信條である。それが御頭徹尾菩薩行を奨励して居るので、菩薩を除いては佛教は無い、その事も、法華の人は優婆塞戒經ナンといふものを眼中に置いて居らない頑迷な者があるから、そこで法華經の方からこれを證明して置いた、即ち法華經の方便品には「但教化菩薩」とお説きになつて、釋尊は最初から涅槃に至るまで但だ菩薩を教化したばかりで餘事無し、何も他の事はして居らぬと言つたくらゐのものであつて、菩薩を教化するといふ精神は法華經の大精神である。法華經は詳しく言へば「教菩薩法佛所護念の妙法蓮華經」と言つて、菩薩を教ゆるの法といふことを看板に掲げて居るのである。日蓮聖人の末法出現の任

務も「無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしむ」と言はれたくらゐに、内にしては日本人、廣くは世界の人間を菩薩として教化すべき使命を帯びて出たものが本化上行の任務であるといふことも明瞭である。その菩薩行といふものを明瞭にせずして、たゞ念佛などを對手にしてごつちが易いか、一字のことで住持迷惑みないなことを何故何時までもやつて居るか、實に淺ましいことではないか。

さうして優婆塞戒經の概要を順序を逐うて話を進めて、大體菩薩行といふものはさう面倒なものでもない、實行可能な大事なことだといふことを御紹介したのであるが、これからいよいよ六波羅蜜の問題に入つて、優婆塞戒經の第十八番目になつて居る六波羅蜜以下に就てお話しして置きたい、この六波羅蜜品第十八に於ては、六波羅蜜といふことを簡潔明瞭に

纏めて説明されて居るのである。

この六波羅蜜を簡潔明瞭に纏めて行くといふことが大事なのである、それに就て先づ最初に法華部の方から證明して置くならば、開經の無量義經の十功德品に

「是の經(法華經)は能く……諸の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛んなる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしむ。」

慳貪といふのは物を吝み、貪ること、他人には何も物も與へないが、自分は如何なる手段に依つても取込んで行かうといふのが慳貪の心である。さういふ者には恵み深い布施の心を起さしめる。慢心の強い

者には自分の身を引締める持戒の心を起さしめる。

腹を立て易い者には忍耐の心を起さしめる。のらゝいの者には精進の心を起さしめ、心の落着かない者には禪定の心を起さしめ、愚癡の多い者には物事のハツキリわかる智慧の心を起さしめる、六波羅蜜を簡單に言へば斯ういふことなのである。これが果して人生に入用なことであるかないか、信心はするけれども慾張りで、少しも人に布施をしない、鼻つばしらばかり強くて慢心ばかりして居る、信心するけれども、腹ばかり立て、辯けて居る、何時もフラフラしてくだらぬ事はかり言うて居る、斯ういふ事であつたならば、信仰の効果といふものは無いのである。信心をすれば憍慢の心を以て布施をする、護るものは護り、信奉すべきものは信奉し、願む所は願み、落着く所は落着いて、ものゝ道理もわかつて來

る。斯ういふことでなければならぬ。それが即ち菩薩である。それをたゞむづかしく考へてしまつて、菩薩なごと言へばびつくりする、名前からして菩薩とでも言へば「観音様ですか、お地藏様ですか、」などと云つて他人の事のやうに思つて居る。さういふ迂遠な雲の上から顔を出したやうな菩薩はごうでも宜い、この人生に接觸した生きた人間そのものが菩薩となつて行ける實行可能の菩薩でなければ駄目ナンである。

であるから無量義經に説かれて居る所を見ても、法華の信心は自然に人々をして斯様な六波羅蜜に進ましめるといふことを意味して居るのである。これを少しく擴げて説けばだん／＼とその意味が能くわかつて来る。優婆塞戒經の六波羅蜜品第十八にはそれが少しく擴げて説いてあるのである。

ことをしたり、怒つて居るかと思つたら泣いて見たり、洵にその態度はぐら／＼して居る。さういふ風にこの六つは皆な聯繫して居る。人格といふのは一つが特に悪い者もあるけれども、併し多くは聯繫して居るので、慥慢の者は腹を立て易い、腹を立てるやうな者はのらくら者が多い。餘程妙なもので、皆な聯絡がある。そこで釋尊はそれ等の人間の性格に關することを十分に研究に研究を遂げられて居るので、所謂三世了達の大智慧より説かれたものが佛の教である。これを輕々しく質に置くとか、屑屋に賣つてしまふといふやうなことは思はざるの甚しきものである。

そこで今此處には惠施を行つて慢心を生ぜざれとあり、布施をすることゝ慢心をしなまいふことを併せて説かれて居る。さうして苦んで居る者、貧

「多く惠施を行つて慥慢を生ぜざれ、窮苦者を見ては身代つて之を受け、常に慈心を修して一切を憐愍せよ」

と説かれた。この六つといふものは聯絡をして居るので、慥貪と慥慢と慥悲と憐愍と愚癡といふものは皆な聯絡がある。のらくらした奴は能く腹を立てる、自分が憐愍して居るから誰か馬鹿にしはしないかと思つて居る。そこへ「あなたは何時もお暇のやうですナ」とでも言はれれば何か馬鹿にされたと思つて、「餘計なお世話だ、この雨の降るのに外に出て働けるかい」といふやうに、のらくら者の方が餘計に腹を立てる、腹を立てるやうな人間は何時も心が落着いて居ない、ぐら／＼して居るから、散亂粗漏の心で、そこに後になつて後悔するやうなことをし出かす。女房の頭に瘤を拵へて、後で謝るやうな

乏して居る者には憐愍を有つて、自分がその苦しみを代つて引受けてやるやうな心を起し、慈悲の心を有つて總の場合にやさしくしてやらなければならぬ。これが布施の行である。即ち布施の行は困つて居る者を憐愍の心を有つて何處までも助けて行かうとする精神を言ふのである。それから

「兩舌及び無義語を遠離せよ、若し暫くも瞋生すれば則ち慥愧恐怖悔心を生ぜよ。」

とあつて、二枚舌を使つたり、意味の無いことをべら／＼喋つたり、何でも無い事に腹を立てたり、愧づべき事を恥と思はない、左様なつまらない事をするナ、これが戒行の一番大事なことである。六波羅蜜の中の第二の戒波羅蜜といふことはこれである、これをだん／＼完成して行けばいろ／＼大きな問題が起るけれども、根本の心懸けはさういふ意味であ

る。忍辱に就ては

「他の忍の勝れるを見て嫉妬を生ぜざれ」

と説いた。人が非常に辛抱強くして居るのを見て、例へば雨が降つても能く働いて居るとか、人から悪口を言はれても腹を立てないとかいふその人格の勝れた所を見て、どうか自分もそれ似寄つたようになりたいといふやうに、他人の長所を見てそれに倣つて行く考である。學問を勉強するのでも、骨が折れるけれども、あの人は一心不乱に勉強して居る。商賣に勉強するのでもその通りで、あの人は何時でも店に坐つて居る、自分は奥の座敷で晝寝をして居るけれども、隣の親爺は何時見ても店に坐つて居る、成程あゝしなければならぬと言つて真似をして行くのが忍辱行である、人が出来にくいやうな事をして居るのを見て嫉妬心を起してはならぬ。これは

は

「出家修道し能く世事を以て用ゐて衆生を教へよ」

佛の教を學んで、世間の事も能く考へて、世事を以て衆生を教へよと説かれて居る。六波羅蜜の智慧行といふものは佛教特別の智慧だけを言ふのではない、世間の事柄を能く知つて、斯ういふことをすればやりに損ふ、斯ういふ具合にすれば幸福が來るといふ事柄を能く辨へて、人を導いてやるといふことが智慧行である。「坊主は世間の事は知らぬ。お經を讀んで信心さへして居れば宜い」と言つたり、信者に對しても「たゞお經を覺えて讀みさへすれば宜い、さうしてお寺に日參なさい、朝からお詣りをなさい。」そんな事はかり言うて居つてもいかぬ。やはり佛法の事柄も知り、世間の事柄も知つて能くこれを導いて行くといふことを、自分の能ふ限りに於てしなけれ

人間としてどうしてもなくてはならぬ事である。それから第四の精進に就ては

「懈怠をなさず、坐臥等の樂を受けず食らざれ」

懈けてはいかぬ、のらくらして餘計に寝過したり、立つて働かなければならぬ時分に何時までも煙草を吸つて居つたり、食事をするので、何時までもぐす／＼して居つたり、酒を飲んでもチビリ／＼やつて、何時お膳を片附けるかわからぬといふやうなことはいけない。斯ういふのが精進の行である。それから禪定と言つて散亂の心を誦めるには

「能く身口意を淨め空閑に樂處して常に寂靜を樂へ」

何時もガヤ／＼して居つてはいけない、靜かな考になつて心を落着けるといふことでなければ良い考は起つて來ないといふのである。それから智慧に就て

ばならない。佛法の大事を心得、世間の事も見分け人を導く者が善良なる出家と言はれるのである。斯様にして僅かな數行の間に六波羅蜜を纏めて説かれて居るのである。

統一團本部教戰錄

△二日(午後一時午開會)法要の後總裁親下は二時間亘つて左の講演をされました。「信心と精進」本多日生親下。雨天でしたが聴衆は九十餘名、來客が有つた爲座談會は中止△九日(午後一時午開會)僧員幹事主催のものに「末法濁法に掉して」千安華大一釋尊に對する吾人の信解」長谷川義一「日蓮聖人及其の弟子」笹川權大僧正△十六日(午後一時午開會)法要後總裁親下の左の御講演が有つた。「大道としての日蓮主義」本多日生親下。來會者八十餘名、岩野少將の顔も見へた。親下の御講演が終るに座談會を開いた。會員の中から大分眞實な問題が出て總裁を中心として花が咲いた。當日は珍らしく信者の住江菊子さんが茶谷から來られたので座談會が終るに川原幹事の主唱で住江さんを中心として總裁親下、岩野少將土屋幹事等六七名で茶話會を開き楽しく語り合つて夜七時半各々散會した。總裁親下は當夜神田信進會の講演會に出席される筈。△廿三日(午後一時午開會)宗門の學生が主催で學林創立十週年紀念會傳道をやつた。聴衆は少なかつたが不相變學生の熱は竹々上つた。木村君眞君鈴木君小泉君山口君等其の他七名計りて入り替り立ち替り盛に血を沸かして五時半閉會後茶話會に移り岩野少將の御挨拶があつて六時半散會した。

妙鏡尼に法衣を贈るの文

本 多 日 生

この度顯本法華宗の度牒を受けて、立派に法尼となられしことは、何より慶賀の至りであり、法尼が東京統一閣に於て、正法の教化を受け、決然志を立て、布哇に布教せらるゝや、當時その健げなる志に對し、深く感歎措かざりしが、渡島後の活躍は一層予をして敬服せしめたり、一女史として異域に法を弘むる勇氣の稱すべきは勿論、諸種の困難と戦ひつゝ、曾て一度も落膽せしことなく、何時も歡喜と護法心に生きて、著々布教の功績を挙げ、多數の男女信徒を接化し、今や正義の信徒結束して優に一箇の正定聚を形成し、年と共に益々法友を増

加す、眞に護法傳中の一人なり。法尼は更に勇を鼓して北米に渡り、大いに法鼓を撃たんとし、之が爲に度牒を拜受せりと云ふ。法尼が近信に云ふ「破れ衣で澤山ですが、どうか税下の御名を記入して、送つて頂きたひのです。米大陸にまで渡つて布教も致して見たいのです。本年は衣なしで、三回はご葬式に参りました。今年六十六歳ですが、まだ「元氣で、世間の人々が驚いて居ます位ですから、御安神なし下さい。機会があれば、一度税下に御目にかゝりたひのですが、税下には一度是非御渡米下さることは出来ませぬか」と、之を讀んで、愈老法尼の意氣盛

んなるに感じたのである、予は容易に渡米し得ない、老法尼も何時歸朝するとも期し難い、こゝに日蓮大聖人の「心こそ大切なれ」の遺訓を思ひ起さざるを得ない。法衣は早速整へて贈ることにせり、この法衣は「法勝利の標章なり」と説かれて、護法の人に取っては此上もなき目出度法服なれば、之を着用する時は、如來の衣を着たる想ひを爲し、忍辱精進の鏡と心得、一層志を勵まれたし。

法號は先に授與せし大姊號を改め、金剛院妙鏡日眞法尼と致されたし、この法號は法尼の護法心の堅きを金剛寶に比し、又正義の信解曇りなきを妙鏡に譬へ、自行化他共に眞實にして、現當二世の悉地を成就するを日眞と名けたり。大涅槃經には正法を護持する因縁を以て此の金剛の身を得たりと説かれ、法華經には藕かに一人の爲に法華經の乃至一偈を説

くも即ち是れ如來の使なりと讃歎せられたり、女人の御身として法華經の正義を異域に宣傳せらるゝ御身は、眞に佛祖の歎美したまふ所ならん、必ず譽れを十方佛陀の願海に流すに至らんか、今生には歡喜の華咲き、來世には常樂の果を結ばんこと疑なし、何の幸福を以てか之に比すべき、いよ／＼身を大切にして、一日も長く淨業に盡さんことを望む次第である。

靈山身延へ

萩野慶三

たち渡る身のうき雲もはれぬべし

たへのみのりの鷺の山かせ

靈山身延、思ひやるだに胸裡清風起る。我が神魂
いくたびか飛んで彼の白雲搖曳の峻嶺、大聖永遠に
在す靈境に至りしぞ。

大聖曰く、

「我が魂は永遠にこの山に留まらん」と。

一昨大正十四年六月廿一日、われ獨り飄然都門を
あとに、年頃日頃思慕の靈山に向ふ。

われ資性頑鈍、才疎に識乏し。反みて自ら愧づ。

されど生平、正を踏み誠を推し、信を抱いてわが本
分を完うすべく邁往するの一事に至りては、ひそか
に自ら心に安んずるあり。唯夫れ世路の峻、往々に
して山路よりも峻に、溷濁紛亂の氣流、やゝもすれ

ば怪雲魔雨を誘ふて、天日ために闇からんとするな
しとせず。鬱屈罔々の胸裡を一洗して、天地浩々の
氣を満喫すべく、暫し塵巷を遁れんとす。

東海道富士驛にて省線を捨て身延線に身を托す。
沿道今しも田植にいそしみつゝあり。空に雨雲漂ひ、
をり／＼降るかと思れば、時に雲の裂け目より陽光
を洩して蒸暑し。

身延驛よりは徒歩、山河雄麗なる富士川の峯めを
賞しつゝ、鐵橋を渡り、左手に身延川に沿ふて山に
向ふ。ガタ馬車の乗車を顧むるを願みず、ひとり静
かに當年大聖入山の光景と、その御心持とを偲びな
から歩を進むること約一里、大本山久遠寺の下に達
す。

山門は窺々半空に聳へたり。これを入れれば千古の
老杉巨楡亭々參差、參道を挟んで兩側に並列す。肅
々森嚴の氣自ら身に迫る。時に薄暮。山際に低迷
せし黒雲見る／＼上空に現はれ來りて、一天晦冥、

忽ちにして紫電閃々、般雷轟々、豪雨沛然としてい
たる。光景何等の凄愴、何等の壯烈ぞ。

鳴る神のひかりはためくはげしさを

ひぢの法のいくさとも見む

左側老樹の下一小屋あり。見るから柔知にして品
よき白髪のお煙、珠數や經本などを賣る。何となく
我が亡き慈母の偲ばれて、懐かしき思ひせり、われ
暫しの雨宿りしつゝ、宿所のことなど聞き、雨勢や
衰ふるを待ちて、左の方一丁を隔つる竹の坊に入
る。坊は師孝第一の日朗が、當年大聖の寶骨を奉じ
て宿りし、最も由緒深き處。

わが部屋は廣くして前庭に池あり。雨脚灑ぐとこ
ろ、真鯉鯉鯉激濁として游泳せり。池畔、松は翠に
皁月は紅に、廂に近く山の端の雨に煙りつゝ、林影
樹影の變化面白きを見る。

雷電こそ収まりたれ、雨は夜に入るも止まず、益
を覆す如く降る。外出もならず、一室に閉ぢ籠り、

明日の天氣を氣遣ひつゝ、夜更けて眠に入る。

翌曉四時起床、五時前坊を出づ。夜はなほ明けき
らず、雨は止みたれど狹霧深くたち罩めたり。蝙蝠
を手にしつゝ、老樹の間を縫ひ行き、やがて石階を止
ること幾百段、堂塔伽藍たち並ぶ廣地に出づ。

先づ祖師殿に昇る。老管長以下衆僧既に納骨室
にて勤行を始め居れり。寂たる曉の山上、讀經の聲
は清く冴えたり。濟めば順次他の堂を巡りつゝ、勤め
をなす。これに隨ふ。六時前終る。寺務所にて御開
帳を願ひ、他の一二の人と共に、恭しく祖師殿を
拜す。

次いで奥の方御親骨堂に導かる。人品高雅にして
装ひ清らかなる一老僧、恭しく堂の扉を開き、内
に入りて次第に四方の戸を開く。堂は八角にして内
に寶塔聳え、瓔珞瑠璃々として垂る。老僧は寂びたる
聲に香量品を誦しつゝ、恭敬懇懇徐ろに塔の扉を開
く。

朝の光ほのかに静けくさし入る處、唯見る寶塔の中に徑尺餘の水晶の八角形をなせる寶瓶あり。御眞骨はその中に奉安せられ玉へり。

まごくと拜する色は、薄墨のなほ淡くして、やうな色に、やう薄紫を帯びませるが如く……至心合掌、南無妙法蓮華經々々々々々々々々。

この瞬間わが五尺の渾身は凝つて護殿そのものとなり、わが神魂は崇高なる感激の高潮に達して、微妙の心緒甚深の法味、言説を絶しぬ。

日夕湯仰せる大聖が護法護國の聖生涯の、血涙滴々たるその大健闘の名残をとどめましたる、至貴至重の御眞骨は、眼にこそ見えぬ閃電の如く靈的電波を送つて、我が神魂の奥深く終生、否後の世までも忘れ難き印象を刻みたり。

あはれ、七百年前大聖が至誠身國の火の如き大活動よ。而して七百年後、永遠の大寂靜を示されつゝある御眞骨よ。

びて苦むせる五重の石塔、中央に簀え立ちて、諸佛諸菩薩も來至さるべく覺ゆ。名も知らぬ美くしき小鳥來つて妙音を囀づるも嬉し。地は幽、境は靈、正しくこれ清淨閑雅の寂光土。われは恍として暫し自らを忘れぬ。而してわがじき悲母をして、かゝる妙景を親しく觀せしめんには、如何ばかり歎び玉はんかと、ひとり心に思ひぬ。

釋王殿をも拜し終りて前の廣場に出で、靜かに歩を運ぶ。時に老杉古楡の密林の上、碧瑠璃の空に旭燦爛として輝やき始めたり。前夜の大雨に、蒼穹も山も森も堂塔も大地も、悉くみな洗ひに洗ひ拭ひに拭はれて、唯さへ俗塵を絶てる聖域の、滿天滿地唯これ清新靈活の氣象々々として溢れたり。朝々仰ぐ旭なれども、今朝のそれは何となく畏くも。天照大神の照臨ましまして草莽の微臣が志を嘉させ玉へるやう、世にも、恭き靈威を頂きたるは、何等の歡喜何等の光榮ぞや。

國を法にさゝげたまひしいにしへの
ひぢりのいのちとはに輝やく
敷島のますらたけをのかゞみなる
君が御骨をいまあふぐかな
曾とさを何にたとへむ身延なる

ひぢりのみほね國のみたから
ちよろづの後の世までもわが國の

はしらとあふげ君がみほねを
拜し終れば老僧はもとの如く寶塔の四面の戸を閉す。室内御眞骨の外、唯われと老僧とあるのみ。人生最嚴肅最沈痛の氣、幽深縹渺として堂に漂ふ。われ靜かに寶塔をひとめぐりす。後ろの壁に、勅賜「立正大師」宣下の表を新に掲げられたるも畏こし。

伏し拜みつゝ、堂を退きて、こたひは書院の椽に立ちて後庭を觀る。庭は翁鬱たる自然の深林を背にし、泉石の趣深く築かれたり。多年の風霜にも寂

あまてらす神もほゝ笑みたまふらむ
身延のみねの寶塔のうへ

道を右手にとり坂を下る。深林は兩側に幽邃の境殆んど人影を見ず。わづかに一人の男に逢ふ。御草庵跡の方向を開きて坂を下り、右して流れに沿ふて登る。數丁にして靈蹟に達す。

約半丁四面もあらんか、石を敷き垣をめぐらし、中央よりや、奥の方に御題目の碑立ちたり。時に老樹數株天を摩して立つ。聖文のうちに、

北は身延山と申して天にはしだて南はたかとりと申して鶴足山の如し。西はなゝいたがたと申して鐵門に似たり。東は天子がたけと申して富士の御山に太子たり。四の山は屏風の如し。北は大河あり早川と名づく早き事箭をいるが如し。南に河あり波木井河と名づく大石を木の葉の如く流す。東には富士河北より南へ流れたり千の銚をつくが如し。内に瀧あり身延の瀧と申す白布を天より引く

が如し。此内に狹小の地あり日蓮が庵室なり。深山なれば晝も日を見奉らす夜も月を詠むる事なし。峰には巴峽の猿かまびすしく谷には波の下る音鼓を打つが如し。地には敷かざれども大石多く山には互礫より外には物もなし云々。

と記し玉ひし處はげに此處なりけり。
草の庵むすびたまひしそのあとに

むかしをしをしのび行く雲を見る

更に聖文をおもふ。

現在の大難を思ひつゞくるにも涙 未來の成佛を思ふて喜ぶにも涙せきあへず。鳥と蟲とはなげごも涙をちらず。日蓮はなかねども涙ひまなし。此涙世間の事には非ず但偏に法華經の故也。若ししからば甘露の涙とも云ふべし。涅槃經には父母兄弟妻子眷屬にわかれて流すところの涙は四大海の水よりも多しといへども佛法のためには一滴をもこぼさずと見えたり云々。

われ低徊願望ひとり胸に當年を描いて沈思之れを久しうす。嗚呼大聖滅後蒼茫六百五十年。樹語らす石言はねども古意幽渺、そゞろに我が衣袂に迫る。英雄回首 卽 神仙、波瀾萬丈の大法戰を戦ひつゝして、紛々たる浮世を外にこの白雲境に入られし後、彼の天を、る峯の松風に、はた彼の矢を射る急流の雄叫びに、さては雪の日月の夕、國を思ひ法を思ひ人を思ふて、甘露の涙を瀧ぎ玉ひし大悲の御面影や、げに偲びまつるに餘あり。

いにしへのひぢり雄々しき戦ひの

あとをしをしのびてわれも誓はむ

夏草やつはものごもが夢のあと

當年飛ぶ鳥落せし鎌倉執權の勢威は史上の夢、皇威赫々天日の如く八紘に遍ねき今、大聖が威靈は堯爾として會心の笑を含ませらるゝを想ふ。
御草庵跡に近く御廟所あり。現に修理中なるが、親しく拜して後、名殘惜しき袂を分たんとす。

たらちねのみ親を慕ふまごゝろは

み國をおもふ心なりけり

ひとたびはみまかりませし母君の

いのち四とせを延べましし君

鬼神も動かざらめや子の親を

おもふまごゝろ天地の道

山にのぼり海にすなごり小湊に

いとけなき日を過しましけむ

波のおと峯のまつかせ小湊を

夢にみませしこともいくたび

ひとり兒を清澄山の奥ふかく

おくりたまひしちち、は、の君

たらちねを妙なる法にみちびきて

みあと弔ふ君が子の道

たらちねのみ親のなさけ海苔の香に

しのびて泣きし君はやさしも

われ平生、大聖が深智大勇と金剛不壞の堅信に讃歎崇敬を禁せずと雖も、就中その至に至愛の情懷、別してその鬼神を哭かしむる底の大忠至孝の純情、熱誠に對しては、ほと／＼感佩に堪へず。若し夫れ、思ひひとたび身延靈峯の最高處、天風颯々たる思親閣の畔に飛ぶときは、世にも清く尊とく美しくしき大聖親子の御間柄、さては大聖が年を経て愈益、その慈父慈母に對する綿々不盡の、思慕感恩の情操の切々として濃やかにあらせられし御有様眼前に浮び出で、轉た感涙を催さずんばあらず。凡そ古今大人格者の惻々として人を動かすや、火の如く泉の如きその至誠純情に基く。われ大聖に傾倒する所以のもの亦實にこゝにあり。

こゝのとせ永の月日を峯のへに

安房の空をば戀ひませしかも

たらちねのみ慕はるけき海山の

雲行く空にあくがれし君

八重の瀬路は遙けかりけり
あつき血を清き涙に人の世の

六十路の坂を君越えましぬ

紫雲樹曳く思親閣までは、こゝよりなほ三里を隔て往復數時間を要す。時間に限られたる身は遺憾ながら、これを他日に譲り、愛を割いて山ふところを出づる流れに伴うて山を下る。心、當年大垂至孝の

面影にあくがれつゝ……。
さるにても昨夜の大雷雨は眞に驚心駭魄の現象にして、打つて變りしけふの麗日の晴々しさは、天に昇りしやうの心地せられて、ありがたさの極みなりき。冥々の天意、果して何をか示し何をか語る？。われはひそかに深省せざるを得ざりし。

京都活動教報

△一日午後二時於本山國語會「法蘭笑合」野口日主臺下△一日午後七時於本山講堂統一青年會「宗獻之人傳」野口日主臺下△二日午後七時於本山講堂護正會「法華經講義」原田本部長△五日午後七時西陣興道館「法華經講義」原田日男臺下△九日正行院に於て正行婦人會「妙莊嚴王」原田日男臺下△十日於大慈院御會式「挨拶」土持師「法味に就て」原

田師△十三日午後七時西陣興道館に於て宗祖御會式報恩講演會「生活の根柢に正しき信仰を」吉塚道隆師「菩薩」細野長雄閣下△十六日於法光院宗祖御會式「御會式に對する覺悟」吉塚師△十七日於成就院宗祖御會式「身延山御書に就て」有田安道師△十九日午後五時於本山講堂「法華經講義」本多日生現下△全日七時於本山講堂統一國講演「偉哉立正大師」本多日生現下△廿七日正行院に於て宗祖

御會式「宗祖の御主唱」原田師△廿八日午後二時於本山開山會「森羅三千の諸相」有田安道師△廿九日夜鶴野田氏宅に於て「佛の教と實生活に就て」土持良達師△三十日午後七時於本山講堂東京立正結社本部主催の巡回活動寫真映寫布教をなす、總持山二卷、皇國の輝五卷、日蓮上人龍口御法難四卷、技師小竹圓妙師、講演「社會教化の主旨」草切信榮師、來會者堂外に溢れ頗る盛況を呈せり。(廣島)

聖訓摘要

三三三藏祈雨事

三千大千世界の中には、舍利弗、迦葉尊者を除いては、佛世に出て給はずば、一人もなく三惡道に墮つべかりしが、佛を頼みまいらせし強緣によりて、一切衆生は多く佛に成りしなり。まして阿闍世王、鸯掘摩羅なんぞ申せし惡人どもは、いかにもかなうまじくして必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども、教主釋尊と申す大人に行き値はせ給ひてこそ佛には成らせ給ひしが。されば佛に成る途は善知識には過ぎず、我が智慧何にかせん、唯だ温き寒きばかりの智慧だにも

本多日生

候ならば善知識大切なり。而るに善知識に値ふ事が第一の難き事なり、されば佛は善知識に値ふ事をば、一眼の龜の浮木に入り、梵天より絲を下げて大地の針の目に入るに譬へ給へり。

(遺文録一二五四)

これは釋迦牟尼佛がこの人の世にお生れならなかつたならば、大體の人は地獄に行くのであつたであらう、殊に阿闍世の如き、或は鸯掘摩羅の如き惡人は、到底助かる途もなかつたのであるが、釋迦牟尼佛といふ尊い方がこの人世にお生れ下すつたことに依つて、それから導かれて遂に彼れんの者も成佛をし、尙ほ多くの人達はこの佛の教を頼りにして救

はれた譯である。それ故に一人の善人が世に生れたといふ事に依つて多くの人が導かれて行くのであるから、この善知識といつて、眞實の教を人に教へて行くといふ事柄は一番大事な事である。それは氣違ひでは仕方がないけれども、極く大體の智慧があれば、即ち暑い寒いが判かる位の常識といふものがあるならば、善知識に値ふ事が何よりも大事である。小さな事は自分の智慧で判かるけれども、生死解脱の大事といふやうな大切な問題になれば、自分が考へても中々判らんものである。その場合には善知識に依つてその教を受けるのが何よりも大事な事である。儒教に於いても「三年道を學ばんよりは、三年師を探ぬるに如かず」と言つてあるが如くに、自分でやつて見やうとしても大事な所は中々判らぬ。それ故に豫ねて私の申す通り、釋迦牟尼佛は「善知識

はこれ大因縁なり、善知識は全梵行なり」と迄言つて、完全な善知識を得たならば、萬事成就するものであると迄仰せられた。但しその善知識に値ふといふ事が容易に出来難い事で、一眼の龜が浮木に値ふよりも、梵天の上から絲を垂れて大地の上に在る針の目にその絲が入るよりも尙は難い事であるといふことをお書きになつて居るのでありますが、この善知識の觀念といふものが今日は非常に衰へて來たのであります。自ら研究し自ら判斷するといふことも無論善い事であるけれども、それは低い事に於てはそれで事が足りるが、宗教の大事、根本の問題に至つては、中々自ら考へて自分で會得するといふことは殆んど望みなき事である。それ故に釋迦牟尼佛の如き傑出したる聖者が世に出られ、その教を遺され、その教の眞髓を傳へて行くことに依つて多くの人が

救はれるのである。縱し吾々に佛性が有り、この世の中にどう云ふ眞理があつても、之れを發見して紹介して呉れる者がなかつたならば、永久に吾々はそれを知らずに行く者である、釋迦如來のやうな傑出した方がこの人間の仲間にお生れ下さつたといふ一つの事實が、吾々を救ふべく茲に端緒が開けた。茲に吾々の救ひの橋が架つた譯である。この事實は非常に大事な事である。唯だ眞理と自己と直接しても、遂にその眞理に接することは出来ずして終るのである。吾々に佛性が有つても、その佛性を啓發すべき事を知らずして終るのである。長者の子であつても永遠に流浪して、遂に倒れ死をしてしまふべき運命にある者が、長者の自覺に蘇るといふことが、これが實に佛様の尊い所以である。そこに感激した者が佛教徒となるのである。これが基督に依つて感激し

た者は基督教徒となるのである。宗教としてはどうしてもさうなければならぬので、唯だ自分自身で眞理に直接し得られるといふ考ならば、決して宗教は起らん、それは哲學者の態度である。宗教は自己以上の大人格者を仲介者として、さうして其處に眞理に接觸し、又自己の最大の光を現はし得るといふことを信するのである。幸に吾々の奉ずる教には釋迦牟尼佛といふ、この理想的な完全な教の主を戴いて、そこに又教が十分に傳へられて居る、これが唯だ暖味な方法であつたならば、佛の精神が何處にあるか判らぬだらう、唯だ一人や二人が内緒で言ひ傳へて行くといふやうなことであつたならば、到底佛の眞意を伺ふことは出来なければ、幸に釋迦牟尼佛はこの教を遺されて、それが結集されて、こゝに傳はつて來た譯である、その中に善知識といふものが生

れて來るのである。

日蓮聖人は「末代の最大の善知識は、經卷を以つて知識と爲す」と迄言はれた、即ちこのお經が大體善知識となる譯である。

人を以て善知識とするは常の習ひなり。然れども末代には眞の善知識無し、法華經を以つて善知識と爲す。

と迄言はれた、その法華經の眞意に基いて、それに先づ精通したる人を以つて善知識として行かなければならぬ。今の人は一般の考に於いても、自ら承認しないことは下らぬといふやうに言つて、總べて自分の智慧に慢心を生じて居る、それが爲に古來の文明を嘲るやうな傾きになつて居る、そこで非常な動搖を來たして居るのである。又日蓮主義の中に於いてもやはりその影響を受けて、少しばかり日蓮主義

といふやうな事で薩張り判らん、頭腦が滅茶々になつて居る、唯だ獨り天狗を極め込んで、何も知らぬといふ者が多い。さういふ弊害を反省する上に於いて、この御教訓は非常に宜しいと思ふ。それから同じ御遺文の中に、

天を地と言ひ東を西と言ひ、火を水と教へ、星は月にすぐれたり、蟻塚は須彌山にこへたり、なんと申す人々を信じて候はん人々は、習はざらん悪人に遙か劣りて悪しかりぬべし。日蓮佛法をこゝろみるに、道理と證文とは過ぎず、又道理證文よりも現證には過ぎず。(遺文録)

といふ事を仰しやつた。これはどういふ事かといふと、天を地と言ひ、星は月より明かなりといふやうな、極く明白な間違ひ、それを顔面もなく言うて居る者がある、さうして又それに随つて行く人が多々

の研究をやると慢心をして、勝手な事を言ひ出すやうな者が續々出來て來るだらう、今も早や少しばかりある。舊い所の勝手な事を言つた型が未だ残つて居る所に、新らしく又さういふ者が出て來て、慢心をする者が非常に多くなつて居る。これは十分に研究してやらなければいかん、法華宗は中々善い教を有つて居る、日蓮聖人を戴いて居るけれども、割合に早く慢心をしてしまふ、さうして善知識を尊ばない。これは日蓮主義者の通弊のやうに思はれる。「善知識」といふ言葉さへも今日知らん信者が多からう。これが眞宗などに行けば、善知識といふ言葉は非常に能く行はれて居つて「善知識に導かれて」と言へば、字を知らぬ婆さんでも「ア、さうです」といふけれども、法華宗の者は餘程鼻の高い信者でも、「善知識? 善知識といふのは何ぢや、お汁粉の事か」

ある。これは何を、指していふかと言へば、法華經のやうな尊い教を押込むやうな話に賛成をして行くといふ者は、恰かも天を「地ぢや」と言ひ、星は月より明かぢや」といふやうな、實に明々白々たる、譬へ方のない間違ひである。然るにさういふ馬鹿々々しい間違ひの方に隨いて行く者が多い、そんなやうな事ならモウ佛法に來ずに、人殺してもして居つた方が宜い、佛法に入つたと思つて騙されて、ちよつと佛法を信心するやうな顔で法華經を敵視し、お釋迦様を叩き倒して、阿彌陀様だとか、お地藏様だとかいふことになつて「それが佛教だ」と思ふやうなことならば、寧ろ佛法などはやらぬが宜い。却つて人殺してもして居つたならば、それは自分の良心の刺戟を受けて、その人殺しが善いと思つてやり居る奴はないから、何時か眼が覺めて「眞に改心しま

した」といふことで、本當の道に入ることあらうけれども、騙されて宗教に引つかつてしまつたらば、悪い事と思つて居らるのであるから、何時までも眼覺めない。それ故にそれは佛法を習はないで、ウブの儘で悪い事をして居る人間にも優つた悪人と

いふことになる。それで佛法の事を調べるには、道理、文證、現證といふことがあるから、真理の判斷に求め、又お經文の明確なる證據に質し、又事實に訴へて見なければならぬ、その事實といふことは、現在に之れを照して見て、その弊害が多々明かになつて居る譯である。この三方面から考察して、日蓮の主張は洵に明白なことだと信する、然るにそれに疑いを懐くといふのは如何にも淺ましいものぢやといふ事をお説きになつた、これは實にこの通りである。一切經の中に於いて法華經が優れて居るといふ

ことは、光の中にお日様が一番明るい、水の中には海が一番大きいといふのと同じ事で、問題ならぬ程の明白な事である。それから同じ御書の終りの所に、

須梨槃特は三箇年に十四字を暗にせざりしかども佛に成りぬ、提婆は六萬歳を暗にして無間に墮ちぬ。これ偏に末代の今の世を表する也。

遺文錄二二六〇

とある。これは實に良い教訓で、須梨槃特といふ人は愚かな者で、三年かゝつて十四字程の經を覚えやうとしたが、どうしても覚えられなかつた、けれども真心があつて佛の教に忠實に信念を捧げて行つたが爲に、須梨槃特は法華經に來つて成佛を許された、即ち周陀、莎揭哆といふのがそれである。これに反して提婆達多の方は非常に賢い人で、六萬歳と

いふ澤山の書物を暗誦にする程えらい人であつたけれども、悪心あつて遂に地獄に墮ちた、生きながら地獄に墮ちたと言はれる位なことである。賢くして地獄に墮る者と、愚かで佛に成る者との差が、是れ偏に末代の今の世を表する也」と仰せられた。今日には賢氣なる有様であつても、邪念が強くして却つて罪を作る者がある、愚かな様でも善心にして功德を積んで成佛する者があるから、智慧と言つても、道徳若くは宗教といふ觀念から離れて、唯だ賢いといふのは却つて罪を作る本になる者が多い。今の文明の全体が破壊に向つて居るなどは、これ正しく提婆達多が六萬歳を暗誦して、面かも地獄に墮ちたといふやうな譯で、いろ／＼と研究や議論をしながら、寄つて集つて世の中を壊はして行く譯である、随分いろ／＼な事をワイ／＼言ひながら、終ひは暗黒破

壞に了らんとして居る、甚だ暗愚な文明だと私は思ふ。それは何かといふと善心が衰へて居る、モツと高潔な道徳、宗教といふものを重んじないで、目前の利害を遂うて、その利害標準で判斷しやうとするが故に、遂にさうなるのであらうと思ふ。丁度提婆が地獄に墮ち、須梨槃特が佛に成つたことは、今の世を諷して居るものぢやと言はれたことは、今日も尙ほ適切なる教訓のやうに感ずるのであります。

淨蓮房御書

この中には別段摘出する事もありませぬ。

大學三郎殿御書

この中にも特に御紹介する所はありませぬ。

名古屋自慶會大會

大正八年末支部を設置し、後獨立して財團法人となつた。毎月地方民衆に教化講演を繼續し、聴衆延人員約七萬人、又市内外大工場約三十ヶ所に十數ヶ所づつ、毎月講師を派遣し聴衆延人員約七十萬。數回の勞働争議を未然に防止し、工場内に繁雑したる不真の團體を驅除し、餘り濶真で無つた工場の邊てを完全に教化した等の顯著なる効果を數年にして收穫した。如何に感化して居つても一切を委囑して講演を繼續派遣する事十回を重ねれば、十分に總てを教化し得べき確信を我が名古屋自慶會は過去の経験から得たのだ。

その光榮なる成績の下に於て大に民衆に叫ぶべく十月廿三日午後六時教化會館に於て大會を開き思想問題大講演會を開催した。時間前聴衆は場に溢れた。その殆んど見てが一粒糶りの知識階級であつた。かゝるすばらしい會合は他の思想的會合に珍らしからう。見よ十數年の奮闘は完全に酬はれたのである。

尼港事件直後神太駐屯軍司令官であつた陸

統合宗學林創立滿
十週年紀念祝禱會

軍中將井上一次將軍は、海の對岸から吹いた赤い風を如何に感じたらうか。約一時間「世界的民族競争に對する國民の覺悟」なる題下に得難き教訓を聴衆に與へた。國本會の理事で我國醫學士界の巨頭であり、時に長野縣あたりへ出掛けて赤い主義の手合を感化する平松市藏先生は「日本國民としての自覺」なる題下に獅子吼した。熱のない、唯口先ばかりで説く連中達の講演では到底聽く事の出來ない事論だ。眞に思想の上から國家を救はんとして奮闘した尊き實踐は約一時間演壇の上で微妙の音聲を續けて居つた。木多院下は思想問題の基準と「佛教」なる題下に懇切に聴衆を喚へられた。大藏、經を讀破しその要義を著述して居る院下の深遠なる思想は世界的思想問題に就て眞の大聖者の高説であつた。華もあり實もある、大講演會は珍らしき盛會裡に午後十時半閉會した。井上平松兩講師の講演は新年號から連載する。

顯本法華宗唯一の教育道場たる宗學林の小石川白山に設立せられて十年を曆するをもつて教授及學生協力し是れを紀念すべく學生傳道を企劃し東京市内外をして法雨に潤しめ若き學生の血はよく精進と勤求の純情を人々に興さしむ。尙十月二十九日午後三時より宗學林に於て祝禱法要を嚴修せり、井村管長、野口、今成、鈴木各樞大僧正及び來賓多數の参列ありて盛大を極む。法要後祝盃を舉げて後校友會發會に移りて多年の奮闘たりし校友會の組織を見る、誠に歡喜に堪へざるものなり。今や教界多端なるのさき此舉は讃すべきものにして又宗學林の近時の淨業さいふべきなり。教授及學生は此度の紀念事業に對し多大の御援助を賜りし共衆諸師の厚情に感泣し居れり。

尙木村日保教授は十年勤績を表彰されたり。

末法の佛教

御送金は振興社の振替を御利用下さい。

一日蓮大上人の心血を注かれたる御遺文を天下に普及し身讀を奨めん爲毎月小分冊で「末法の佛教」と題して發行する事に至しました。

一難解の熟語には註釋を施しましたから初信者未信者にも了解され易いと思ひます。

一本分冊は完結しますれば大聖人御遺文全集となります。

一國の柱となり船となり眼目となる有志の御入會を御望して止みません。

會	一ヶ月	半ヶ年	一ヶ年
費	十二錢	六十二錢	一圓廿四錢
送料共	全	全	全

(見本御入用の方は一金十錢封入御申込み下さい。)

申 込 書

東京市淺草區清船町

統一閣圖書部

東京四谷區南寺町法恩寺内

御遺文普及部頻伽會

府下高田町雜司ヶ谷一五四

振興社

振替東京五六一四二番

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
 追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
 (充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分なる檜材は于割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六(二八番))

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清定
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高雅色

價 定 一 統		
一冊	一冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共
事之金前	事之金前	事之金前

料 告 廣 一 統		
表紙一頁	表紙一頁	表紙一頁
金貳拾錢	金拾五錢	金九錢
圓	圓	圓
前	金	之
事	之	事

昭和二年十一月廿五日印刷納本 (第三百九十三號)
 昭和二年十二月一日發行

不 許 複 製

編輯兼 國友日斌
 印刷所 名古屋千種町字五反田五二番地
 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所

名古屋市東區田代町字城山七十七番地

編輯所 統一編輯局

名古屋一〇八一九番